

駒の話

泉鏡花作

全一章

横町だけれど、私の家の裏庭とは、板塀一重、むかつて生垣で、中に細い露地一つだけだから、下屋の屋根は二間とは隔らない。其の横町の、二階家は――今はあき家に成つた――門も羽目も黒く塗つた處へ……御同様だが、より以上の古家で、窓も瓦も、恚う黒いほどだから、通稱を黒邸と言ふのゝ二階の窓、階下の濡縁、おなじく煤ぼつて黒い湯殿口に勝手次第、氣の向いたまゝに、白い猫が、すつと顯れる。

野良猫のやうに、のそ／＼と出たり、泥坊猫のやうに、ごそ／＼と引込んだりするのぢやあない。女猫で、容子よく、すつと其の、顯れる。

眞白ではないが、茶の雑毛が殆ど目立たない處へ、事あつて身構へると、颯と靡いて、其の斑さへ隠れたのである。けれども、白とも、青とも言はないで、稱は駒であつた。――近所の女たちは、「駒ち

やん／＼」と呼んだものである。

私の母は、島田鬚の若娘の時分には、大層猫がすきで、膝に抱いたり、襟を押つかけたりしたと言ふ。が、それと聞いてさへ嫉ましくらゐで、くやし。い。．．．もの心覺えてからは、内に飼猫は居なかつたし、小兒は犬と中がいゝ。で、馴染のない處へ、善惡譚だの、猫又七變化などゝ云ふ草雙紙で脅かされて、猫は繪の如く、お妾を嚙つたり、婆に化けたり、人に祟るものと思つたのが、ならひと成つて、嫌よりは不氣味であつた。――猫ぎらひが、品評をするのは當らないし、第一、世間で云ふ人間の見る目と、あの連中の見る目とは、面の妍醜の標準が違ふさうであるが、女たちは、駒ちゃん は別品だ、別品だと言つた。猫の目と云ふ目も、い つも細りして、裂けた口も何處となくニヤリ．．．．いや、何うも此では少し氣味が悪い、決して然うした意味ではない。――とに角色白の別品だ。

はじめ見た時分は、内の物干に、丸くなつて日南ぼつこをするのも、ぬつと伸びて塀の上を傳ふのも、

實は、大禁物の蛇が、とぐるを巻いたり、蜿を打つたりするほどでない迄も、餘りいゝ氣持はしなかつた。――叱！ 畜生。長刀を廻すやうな手つきで、ぎやうさんに遠くから迫立てると、
「裏の家へ聞えますよ、」と女たちに、たしなめられたものである。

そのうち、一年、夏のはじめ頃から可厭な病がはじまつて、大分流行の兆があつた。市内の其處此處に、病氣のぼやのやうな黒煙がパツと上つた。鼠が毒を銜へて放火をする。この火は水では消えない。皆肝を冷した。

金杉の屑屋の部落の中に燃えはじめた時――
折から下根岸に住居のあつた、なき蕉園さんから音信のはしに――「近所に可厭な鼠が居ます。
お近づきなさいませぬやうに。」――「今でも其の言葉の優しさを覚えて居る……病氣の性質も、大擲大抵これでお分りの事と思ふ

其の時の、駒ちゃんの功績と言つたら。町内家並

五軒七軒、鼠を驅ること麻の如しで、梁へ逃れるのを、衝と獵つて、引伏せて、ふツと咽喉を搔く状は、姿優なる巴女が、馬上に豪の敵と引組んで、ばらりと鎧の袖を揺る．．．とゝもに、敵手の體は、もんどり打つて、地に落ちる趣きがあつた。

其のたのもしさを想はれよ。

次手だから言はう。．．．蕉園さんの話だが、そのお祖母さんは、たしか京都の人で、猫ずきであつた、春雨のころ、もう塞がうといふ炬燵に、長閑にあたつて居ると、ふつくりと檣に寝た、京から連れて来た、年久しき飼猫が、ふと欠伸をして、退屈さいうに（おゝ、しんど。）と人語をなしたと言ふのである。猫好きだから敢て妖とせず、また何の異状もなかつた。成程、猫が言ひさうに思はれる。

これも、むかしの書物にある　　或山寺に飼つた老猫の、鼠を驅るに妙を得たのが、夕まぐれ、けたを走りざまに獲ものを追ふと、爪およばんとして、破畳へ落ちて逸れた。トタンに、「南無三。」

と叫んだのを、まさしく老僧が聞いたと言ふ。

世にあり觸れた想山著聞寄集は、眞僞はとに角、怪奇を平地に語つて、深切老實なものである。それが説く、（馬のもの言ひたる事）の中に、東海道藤澤、化粧阪にて、權吉と云ふもぎだうなる馬士の馬。（毎日々々重荷を背負はする、末の冥利が悪かんべいさ。）と言つたとあるは、然もありさうで、然も野氣を帯びて笑はせる。が、同書にも引いた伽婢子に、延徳元年三月、將軍義熙、江州栗本の陣に病んで逝く。その前夜、十五間の馬屋に立並べたる馬の中に、第二間の馬屋の葦毛の馬、忽ち人の如くものいふ。いまは叶はぬぞやといふに、又隣の河原毛の馬、あら悲しやとぞ言ひける

これはどうやらもの凄い。

が、御安心を願つて置くのは、私は何も、駒ちゃんが人語を發したとまでは申さないつもりでる。

言は聊か輕佻だが、駒はまつたく、よくとつた。

――猫が鼠を取るに不思議はないが、駒はまつ

たく、よく取つた。――おなじ取るにも、巧拙のあることは拒まれない。夜中に捕るにも、がたり、ぴしりと騒々しい音を立てるなど、云ふ事は決してない。噛んでも獲ものの血を、板の間にも壁にも、一滴も垂らさない。畳には毛一筋散らさず、濡縁を遠慮なく歩行しても、泥のぼつぼつとした、あの足跡などは留めなかつた。

はゞかりの壁の崩れから、鼠の子が、ちよろ／＼を通り越して、ぞろ／＼出る。病沙汰のあつた折は、皆めら／＼と火ほどに見える。われら、手のつけやうのない處に、駒は油障子の根に泰然と控へて、そんな鼠などは、出鼻の面を、踞つたまゝ一つ、前脚で、トンと地を叩いたばかりで、もう獲ものはぐつたりと成つて、凜とした髭の下にぶら下がつて、ふる／＼と尾が震ふ。鼠のためには氣の毒だ。残酷であるが、その、猫に捕られるのは因縁事だし、其の人に忌まれ恐れらるゝやうに成つたのは、おいらの所爲でも、三年さきの烏のせみでもない。學者がたと、衛生がゝりさんと、お醫師である。．．．．．いたし方がない。で、然うして、活きながら啣へた

鼠の子は、忽ち屋根を飛んで、飼主の許にかへつて、その兒等、猫の兒の前に放して走らせて、狂はせて、實地に、狩る事を教へ、且つ飼に當てるのださうである。齒形もつかず、發刺たるまゝに取つて運ぶのは、巧でなければ成らない、と皆が言つた。

駒は身だしなみも可い。一寸上ると雨が降るとか云ふ、屋根の日南で鼓草が生えたやうに、あの顔を前脚で、――唯、ちよいと行ると・・・耳の痒い時でも、足のうらのむず／＼する時でも、堀に居て、瓦に乗つて、窓下に、湯どのの屋根に、何處に居る時でも、人の目に觸れる處で、うしろ向にも、前覗きにも、駒の面洗をし、化粧をしたのを見たり、た事は嘗てない。身だしなみが可いと言へよう。今時の藝妓は廊下どころか、芝居の棧敷に居てさへ、ぐい／＼と顔をつくる。座敷でさへ鼻の下を伸ばして塗るのに――

唯一度、下町の知合の娘が来て居て、暑さのあまり、恥らひながら私の露地うらで行水をした。色の白い女である。極りを悪がるから、電燈の五燭さへ

引張らないで、そのもの蔭は暗かつた。が、幽に二
日月が背戸越にさした。で、ひとりで、手拭を背に
當てつゝ、涼風に誘はれて、葉越に圓っこい片膝を
立てゝ振向くと、例の黒邸の生垣をつたつた。――
詠へは夕顔だけれど。――糸瓜の花の、ふわ／＼
と大きく咲いた中に、ト耳が立つて、目が光つて、
下屋の軒端の葉がくれに、大きく白く面を洗つて居
た。

娘は脊筋を裂かれたやうに、キヤツと言つた。

道理だ。――さりながら、男猫ではなかつた
のである。

御免なさい。――これから一少々せう／＼
化けますから。

女中なぞ、暗いまゝで、足馴れた臺所の流し元へ
出ると、天井うらで、コトリと静かな音がする。見
ると、二三段棚を釣つた、天井近い破風の隅に、
ほの白く乗つて居る。

「あら、駒ちゃん、」

と、とん興な聲を立てて、忽ち、袖を蔽うた口許で、極低聲で、

「來……の……て……居……」

る……の……」

と、かすれて囁く。――猫の氣になつて、あ

とで言ふのを聞くと、うつかり「あら、駒ちゃん」

と言ふと、駒が前脚で、軽う一寸壓へる、（あな

がま）と――其處で、壓へて置いてから、髯を

捌いて恂う口を開ける……可恐くないやうに

ニヤーと言ひさうで、然も微かな聲さへも立てない

のは、（來て居ますが……靜かになさい――

騒ぐと鼠が参りませぬから、）と言ふのださう

で。

「伶俐ですこと、」

成る程、きけば然うらしい。

長き夜には宵から來て狙つて居る。

が、不意に出會ふものを驚かすまいために、コト

りと平時の合圖をするほかには、もの音を立てない。

がたりと響くと、

「あゝ、取つた。」

寝そびれた枕に響いて、すぐに知れる。忽ち風の
抜けるやうに窓を出て、露地を裏の屋根へトンと飛
ぶ音。やがてトーンと聞ゆるのは、駒が寢床へ歸つ
たのである。

「はい、誰方。はい、はい、誰方、はい……」
唯今……」

蕭條たる秋の眞夜中であつた。私は一人で二階に
居た。勿論、仕事をして居たが、不意にこの聲に驚
かされた。階下の奥に寢て居る家内の聲ではない。
女中だが、誰方といつて起上つた……夢を見
たか、魘されたか、寢惚れたか、それにしても、は
いと言つて、唯今は、穩かでない。眞夜中……
置時計が二時半を五分前だ。

何とも不氣味だ、が、勢を示して貫くやうに階子
を下りた。

家内も、その聲で覺めたらしい。が、蚊帳を取つ
たばかりの頃、衾を半ば抜けながら、蟬が殻を脱い

だやうに、いや、空蝉化爲蟹蜷つた形で、寂しさうに怯えて居る。

引添つて、私は立つて、氣を配つて、聲を呑んで顔を見合はせた。

もう、女中部屋の障子を開けて、女中は臺所をがた／＼行く、水口を開けるらしい。

「誰だ！」

と既に言はうとした時、

「あゝ、駒ちゃんなの—— まあ、駒ちゃ

ん………」

ニヤ——

忽ち勇氣づいた。

「何うした。」

と、私たちは、その一重隔ての襖を開けると、女中部屋は眞暗である。急いで電燈を点けた時、女中は臺所をがたひしと廻つて居た。

「何うしたんだい。」

「あゝ、駒ちゃん—— 駒ちゃんです。………」

鼠を取つて、いまいつもの處から出て行きました。

兀鼠の大きな奴でございましたわ。」

「あゝ、鼠か。」

私は、茶の室へ来て、呼吸つぎに温湯をぐいと飲つた。家内は箆筭によつかゝつて、

「夢を見たの——はい誰方……唯今つて言つておいでだつたよ。」

「え、夢でございませうか。寢て居ます處へ駒ちやんが来たんでございます。……それが他所のおかみさんの姿をして居りましたの。——白地の中形の浴衣を着て、黒い帯を引かけにして、たばね髪で……あの、容子のいゝ中年増なんでございます。」

と言つた。までは、何を寢惚けたらうと思つたが、

「其が、あの、そして……それが、あの、脊が七八寸、一尺とはございません、小さな婦で、暗い中に、透通つて見えたんでございます。」

私は茶の室から立つて出た。ぎよつとしたやうに

引きさが
引退る家内と入かはつたのである。

女中は、枕もとで、膝小僧を押し包んで、

「あの、其の婦が、私の枕もとに……」

と言ひかけて、枕を押しへて、きよろ／＼と四邊を
視ながら、

「いえ、門口でございました。門の戸の外に立つ
たのでございますんですが、小さな婦の背丈に合は
せて、其の戸の高さつたらありません。木目があり
／＼と立ちまして、あの、まるで、杉の樹が突立つ
たやうなんでございます。其の戸を、コトコ

ト……然うでございませぬ、トントンとは告
しませぬの。コトコトと敲くんでございます。それ
が、戸の外に立ちましたのが矢張り透通つて此方か
ら見えますんでございますもの。ーはい／＼と
言つて、誰方と、格子を開けましたつもりでござい
ましたのが、このお臺所の障子でございましたやう
に思はれます。中年増のおかみさんが、其處に立つ
てゐますから、誰方と申しますと、一寸おあけ下さ
いました、小さな聲で言ひますから、はい、と言つ
て、其の、大な、高い戸に手を掛けました。え、

それが其處にございます、其の張物板でござい
ました。――戸ぢやあない、おや、張物板と、氣が
着きますと、足許に障子の際に、駒ちゃん
が、うしろ脚で立つて居ましたのが、すつと前脚
をついて、あの、いつもするやうに、口を大
く開けて、二ヤア。

「キヤアとも言ひさうな家内も熟と聞いて居れば、
私も我ながら恐れなかつた。第一女中が澄まして居
る。

「あゝ、この二ヤアだよ、さつきから、女中さん、
女中さんと聞えたのは。然う思ひ／＼、あの、二枚
重ねてありました張物板を、ぐつと引きま
す。と、……吃驚しました……大な鼠が隅
の方に、――旦那様が、襖をおあけなさいまし
た明がさして、目を光らして居たんでござい
ますが、それと一所に、駒ちゃん
がわけなく引脚へて、一寸
仰向いて、私に大さを見せて、すいと、あの穴から
湯どのの屋根へ抜けましたんでござい
ます。漬もの桶と壁との間へ、晩方、張物板を立てつけました、

わづかの隙間へ、遁げ込んだんでございませう。駒
ちゃん、餘り狭くつて、何うしても入れなかつた
もんですから、枕許の障子を敲いて、私を呼んだん
でございますのよ。」

女中は、更に猫の氣に成つたやうに、歴然と然う
言つたのである。

翌朝は、水口から屋根を覗いて、軒端に挨拶でも
して居さうな駒に、

「昨晚は。――」

「お前さんはいゝ年増なんだつてね。」

と女たちの笑ひながら聲を掛けて居るのが聞えた。

――駒は、それほど、柔和で、鷹揚で、もの靜
かで、氣味を惡がらせなかつたのである。

「お前さん、一寸お前さん、來て御覽なさいよ。」

「何だよ。」

「駒ちゃんが嬰兒を連れて來ましたから。」

「ふう。」

臺所で呼ぶのを、茶の室で答へて――月末は

近づくし、いゝ分別はつかないし、私是一向に氣のりがしない。

時に、お菜ごしらへをして居たのだから、おいしく食はして喜ばせようと思ふ時ばかりは、山のかみにも邪念はない。慈眼と言ふ微笑んだ顔色で、襖口へ顯れて、

「見てお遣なさいよ。――折角ひとの言ふ事を聞分けて連れて来たんですからさ。――昨夜晩方、臺所を片づけて居る處へ、早めに棚の上へ駒ちゃんが出来ましたからね。……（駒ちゃん、お前さん、このあひだ、お産をしたと言ふから、お鰹節をお祝ひに上げたぢやないか。あかんぼを見せてくれなきや、ずるいよ）ツて、然う言つて……」

「あゝ、さもない事を言ふ。」

「だつて先は、畜生ですもの。」

「此方が人間だから、尚さもない。」

「でも、何でも、よく分つてね。……いま臺所口へ来て、小さな聲で鳴くから、出て見ますとね、一疋つれて来て居るの。見せに来たんですよ、

きゝ分けて。……よ、見てお遣んなさいよ、
かはいゝんだから。」

女中の下駄をかりものにつツかけて、臺所を裏露
地へ出ると、

「おや、いつの間にー」

三疋揃つて居た。おなじやうな、白勝の三毛の、
頭の扁たい、ふよ／＼と大きい、そしてまだ肩の細
いのが、ちよぼりとした尾を動かしながら、鼻のさ
きで、ふう／＼と、ねだ石の、それでも鼠の往交ふ
らしい穴を嗅ぐ。駒はその黒邸の、こはれかゝつた
裏木戸の隅の埃箱の上に、前脚をついて、胸に一疋、
これは黒斑なのを抱いて乳を吸はせながら、地から
ふわ／＼湧いたやうな、其の三疋の兒を、靜かに、
熟と視て居た。

「かはいゝね、みんないゝ兒だね。あゝ、いゝ
兒だ。」

と、雨上りの小春日和で、ぼツと眞綿のやうな地
氣の漾ふ中に、頭を撫でるのを、駒は嬉しさうに、
恂う顔くらしい。むれて立つごみの濕氣も、この時

和光同塵で、仔猫はたゞ春の陽炎に、毛の生えたものゝやうであつた。

「抱いて居るのは、御祕藏かい。．．．．．
おや、もう威したね。　　―　　さあ、皆つれておい
で。　　―　　犬が来ると不可ないから。」

そのうちに、ふら／＼と木戸の下を潜りさうにするのもあれば、埃箱に立ちかゝつたのもあり、いつか、駒の背に乗つたのもある、と見るうちに、最う一つも居ない。子供のしまつに、敏捷い駒の効性は、さながら、腹へ吸込んで、人目に消したものゝやうであつた。

「．．．．．凄いやうに、よく人の言ふことが分つてね．．．．．」

いや／＼それよりも　　―　　その頃、九段上に可なりな鳥屋があつて、大分遠方にもかゝはらず出前をしてくれた。．．．．．暮方が、臺所で、この調味をして居ると、あゝ、其處は畜生だ。鼠を捕ること
上述の如き、駒だから、鰯の脚や、秋刀魚の腸など

に、びろつくやうな不行儀ふぎやうぎなのではなかつたが、鳥とりだけは何どうも堪たまらないと見みえて、疾はやく香かほを嗅かぎつけて、水口みづぐちから顔かほを出だしてニヤーと行やる。・・・二切ふたきれ、三切みきれ、あいよ、と何時いつも喜よろこばせて居ゐただけれど、私わたしは自分じぶんの口くちからも言いふ・・・さもしい話はなしだが、此この御馳走ごちそうは些ちと堪こたへる。臍物ぎまつなんど舐しゃぶるのではない、さゝ肉みや、皮かはつきをペロリでは、その、まつたく堪こたへる。もう御免ごめん、と斷ことわつて、おすそわけをしない事ことに成なつて居ゐた處ところ。――今度こんどは縁側えんがはを覗のぞいて――茶ちやの室まに鍋なべを掛かけて、ふつ／＼芳かじはしい香かほを立てて居ゐた鍋なべに向むかつて、頸くびを伸のばして、座敷ざしきの眞中まんなかへ、ぬツと來きた。

「遣やるよ。」

私わたしは襲おそはれたやうに片膝立かたひざたて、

「お遣やりよ。」

と言いつた。

「不可いけません、不可いけません、不可いけません。癖くせに成なります。きりがな**い**んですから。――あつちへおいで、駒こまちゃん、不可いけない。」

ニヤー

「遣つた方が可いよ。」其處へ、框の戸が開いた。家内が取次に立つたのを見ると、待構へた客だつたから、とに角二階へ、と私は性急・・・以上の慌てもものだから、いきなり階子段を駆け上ると、ヒヤリと觸るばかり裾に搦んで、大きな毬の如く、ばつと飛上つたものがある。忽ち目前の畳へ、白くもり上つてニヤーと鳴いた。くらがりで、この時は悚然とした。遣るよ、と言つた然諾を解し、謝絶した家内のあとは追はないで、わざ／＼二階へ飛んで縋つたのである。とばかりで、私はアツと聲を立てた。

駒も、ものほしへ衝と逸れた。その瞬間、鍋はひとりで煮えて居たのに、皿には鳥の肉が捌いてあつたのに――けれども、盗みも奪ひもしない。一嚮掠めもしなかつたのである。

夕の雲は定まらず、朝の風は亂れた。長雨、また旱、・・・蒸暑さ、また急に冷い暴風雨など、よくない時候のつゞくうちに、駒は然う言ふうちに年を取つた。老猫と成つた。下性が悪くなつよ、汚

いねえ。畜生と、近所、合壁、もの干棹を振廻す、
バケツの水を掛けるやうに成つた。

遠慮らしく、飼はれた、その黒邸の棟さへ、憚つ
て、何處を密と傳つたか、背戸續の裏の平屋の霜の
日蔭に、小さく向うむきに踞る。・ ・ ・ 腰に張
がなくなつて、べとりとして、毛も汚れた。

海鼠を乾したやうな形に、僅ばかり、陽の陰に尾
を暖める。・ ・ ・ 時々その状を、あはれに見た。

夜は塀の上で、げぶ／＼と嘔吐きなどする。
最う屋根へも出ない。

唯、あの、陽炎の影のやうに、一度連れて出たの
を知つて居る、三匹の仔は、いづれも他へ貰はれて、
その時、胸に抱いて居た、やはり種の黒斑が残つた。
おなじく、優しい、おとなしい雌猫で、もうこの仔
猫の方の世に成つて居たのである。が、餘り駒があ
まやかした。・ ・ ・ 目に立つて、かはいがるので、
飼ぬしも此を残したと言ふのだが、・ ・ ・ その、

おとなしく、優しい處ばかりが親猫を體して、駒が半分萎して、投げる鼠の子にさへ、あとしぎりをするのだと言ふ。……駒はそれを見ると、睨みもせず、いぢらしさうに抱き寄せて、しつとりと頬ずりをするのだと言ふ事であつた。

「弱蟲やい、やい。」

「馬鹿々々々。」

と、女たちも囁したが、其の黒斑は、穩かな日に屋根へ出て、湯殿の廂へ下りようとする、三尺のたかさもないのに、前脚をソツと下げるかとすれば、引込めて、手を焼いたやうにおど／＼して後へ退いた。

向うの屋根に、あの海鼠のやうにへたばつた駒が、此を見て、耳を吃と立てながらも、萎々と成つて、其の都度ぐつたりと俯いた。

それでも一度、そのうち女中が黒邸へ行つて、縁の下から、駒を抱いて來た事がある。

ふ．．．．私わたしは惻然そくぜんとした。

餌えさは、そのまゝ白しろく乾かわいた。さすがに鼠ねずみは出でなかつた。が、雀すいめの可恐こはがる事ことは、それ以上いじやうで、何なんにも成ならない。．．．．氣きがついて苦笑くせうをせざるものなし。――駒こまは嘸さぞ人間にんげんを笑わらつたらう。いやもう笑わらふ元氣げんきもなかつたらう。――抱だいて返かへす時ときにもの干ほの上うへにしたゝか尾籠びろうをして居ゐたから。恥はぢてか、あはれにも、禮心れいしんで皿さらにもつた小魚こさかなは、面おもてを背そむけ、尾をを垂たれて食くはなかつた。

黒邸くろやしきには、大だいなる塚つかの如ごとく、末路まつろの猫籠ねこゝもれりと、昔むかしの功績いさをしに何なんとなく、人ひとは爾しかく知しりつゝも、しかも誰たれも、殆ほとんど其その存在そんざいを忘わすれたのであつた。

冬ふゆの日早ひはやく暮くれかゝり、雲暗くもくらく、しぐれ來きたらんとして、しばらく明あかるかつた。せはしく、しづかに、さみしかつた時とき、私わたしは行ゆきかゝつた奥おくの座敷ざしきで、一驚きやうを吃きつして不意ふいに膝ひざをついた。どしん、みり／＼づしん、ぐわら／＼ぐわら、キヤーワツと言いふ、女をんなまじりの人聲ひとこゑで、合壁がつべきが、露地ろぢへ、上あの空そらで飛出とびだした。

駒こまの、仔猫こねこが、埃箱ごみばこの傍そばで、こぼれた萩はぎの、蝶々てふ／＼に、からかつて居ゐる處ところへ、可恐おそろしい獵犬れいけんが襲おそつて來たのである。これは、横町よこぢやうの某邸ぼつぢやしきに飼かはれた焦茶色こげちやいろの洋犬やうけんで、澤名あだなを鬼鹿毛おにかげと言いつた。――つらも、大おほきさも殆ど耳みみを垂たらした小こづくりな馬うまに齊ひとしい。

――その頃ころ、私わたしの内うちに居ゐた脊せの高い、書生しよせいさんの顔かほを、いきなり舐なめ、這すべつて、頭あたまの上うへへ頤あこをのせた。……筆筒たんすとすれ／＼ぐらゐな横露地よころぢむき向むきの小窓こまどを、だしぬけに覗のぞくと、ぬいと女中部屋ぢよちうべやへ額がくに似にて面つらが掛かつた。――大犬おほいぬの、その慄へうかん悼なのが、まつしぐらに、地ぢを摺すつて、飛とんで、仔猫こねこを獵とつたのださうである。

何處どこにて守まもつたか、誰だれも知たれない。――瞬時しゆんじに我わが兒こを口くちに銜くはへた老猫らうへうは、雲くもから駈かけさがつたやうに見みえた。ト横よこに退ひいて、かはすトタンに、後脚あとあしで湯ゆどの、戸とを蹴けつた、その力ちから、其そのはずみで、地ちから宙ちゆうを二丈三尺じゆざうさんせき、黒邸くろぢやしきの下屋げやの屋根やねの眞中まんなかへ颯さつと飛とんだ。總そうの毛けは一團かたまり、吹雪ふぶきが空そらに翻ひるがへるやうに見みえた。

その中空なかぞらの煽動あふりに捲まいて、故わざとか知しらず、棒ぼうに渡わた

した六七本　　――　　雨もよひで干ものはもう何家でも取込んであつたが　　――　　もの干棹を、ばら／＼と揺落とす、振られて前後に、いきつく間もなく落ちかゝる、數の棹を、下の鬼鹿毛は、撥ねくゞり、飛び抜けるのに、あたりかまはず、戸にも木戸にも荒れ狂ふ如くぶつかった。ふつかりながら、尚ほ空に躍つて狙つたのである。兩方のその響きで、内も鄰家も、向合つた平屋の格子戸も、戸は外れる、木戸は撥ねる、臺所の棚のものは、何家の皿小鉢もばた／＼と皆落ちころげた。

駒の威力ばかりでない。借家の微力も加はつて、串戯ではない、實際その震動は凄じかつた。

私が見た時、獵犬は芥箱に、頭をついて喘いで、駒は藁に、仔猫をかばつて、スツクと爪を立てゝ居た。しぐれの雲に乗つたやうに、面は光つて凄かつた。

が、恐怖に腰の立たない仔猫を、かひぬしの家人の、屋根へ出て抱いた時、駒は霸の消えるやうに見

えたのであつた。

【完】